

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	兵庫県
-------	-----

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	日高町立日高西中学校					
学 年	1年	2年	3年	障害児学級	計	教員数
学級数	2	2	2		6	14
生徒数	62	59	66		187	

研究の概要

1. 研究主題

「自ら学び、自ら考える力を育成する」  
 ~「少人数授業」や「総合的な学習の時間」の取り組みを通して~

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

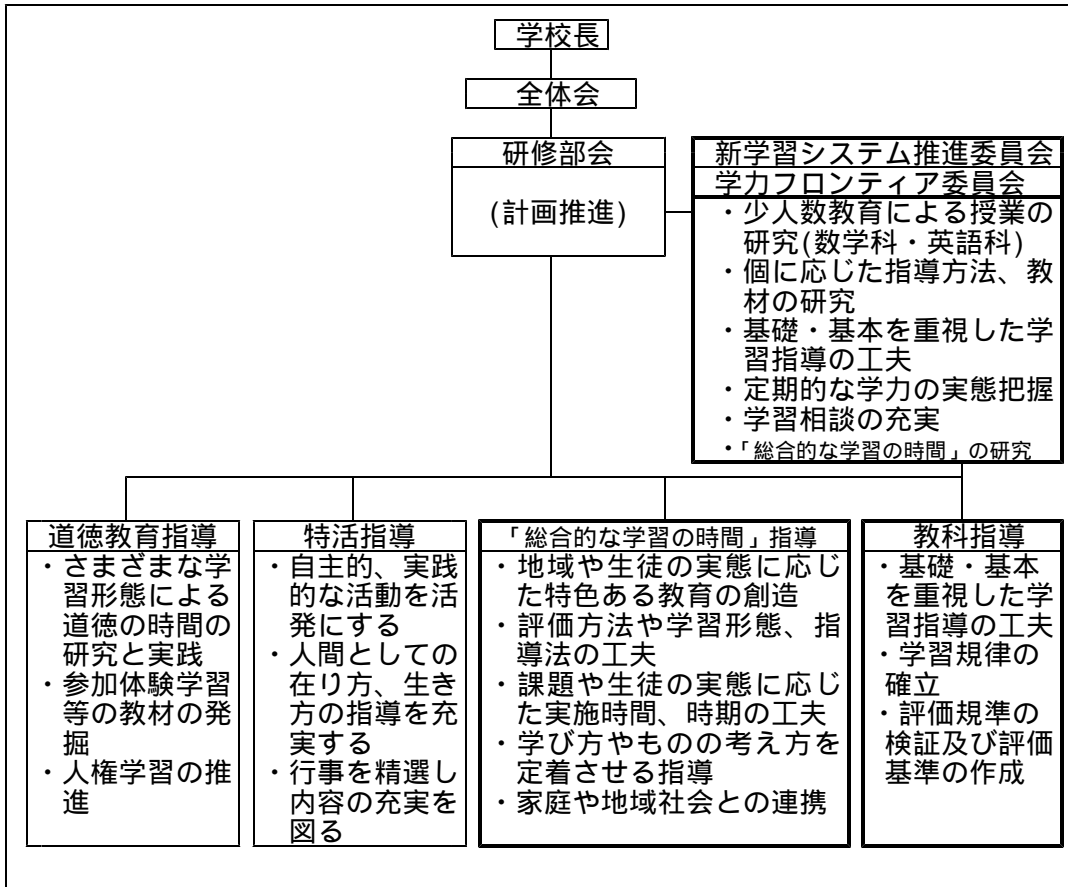
- ・ 1、3年生・数学  
生徒の理解の状況に差が出やすい教科、学年であるため。
- ・ 2、3年生・英語  
生徒の理解の状況に差が出やすい教科、学年であるため。
- ・ 全学年・「総合的な学習の時間」  
地域に関心をもち、体験を通して、自ら課題を発見し、問題を解決する能力を身につけさせるため。

(2) 年次ごとの計画

平成15年度	<p>テーマ                  「自ら学び、自ら考える力を育成する」                  ~「少人数授業」や「総合的な学習の時間」の取り組みを通して~</p> <p>研究の見通し(仮説)                  学習規律を確立し、基礎となる学習習慣や学び方、教科や地域の特色に応じた指導方法や指導体制を充実して、個に応じた指導を工夫すれば、学習意欲も高まり、社会の変化に主体的に対応できる「生きる力」の基礎が培われるであろう。</p> <p>研究内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学習の手引き作成 来年度の入学生に向けて、学習の手引きを作成して各教科の学習へ取り組む姿勢や家庭学習の方法を具体的に示し、「自ら学ぶ」姿勢をサポートする。</li> <li>・ 学習相談の充実(定期テスト前、長期休業日の間) 定期テスト前や長期休業中に学習相談を実施し、個に応じた指導や基礎・基本の定着を図る。</li> <li>・ 少人数授業や個に応じた指導のための多様な指導体制についての研究と実践</li> <li>・ 定期的な学力調査の実施(客観的な評価による学力実態の把握) 生徒の理解に差のでやすい数学と英語については、少人数授業を実施し、定期的にかつ客観的に学力の実態を把握し、その後の指導に生かす。</li> <li>・ 評価規準の見直しと評価基準の作成 評価規準の見直しと評価基準の作成を行い、基礎・基本や学習内容ねらいを明確にして授業に臨み、指導と評価の一体化を図る。</li> <li>・ 生徒へのアンケートを実施(年1回)</li> <li>・ 総合的な学習の時間の充実 「ふるさと」をテーマに、1年次「地域を知る」2年次「地域を探る」3年次「地域の将来を創造する」としてグループ学習を実施し、「自ら課題を見つけ問題を解決する力の育成」の充実を図る。</li> </ul>
--------	--

平成 16 年度	<p>テーマ 「自ら学び自ら考える力を育成する」 ～「少人数授業」や「総合的な学習の時間」の取り組みを通して～ 研究の見通し（仮説） 学習規律を確立し、基礎となる学習習慣や学び方、教科や地域の特色に応じた指導方法や指導体制を充実して、個に応じた指導や多様な学習形態を工夫すれば、学習意欲も高まり、社会の変化に主体的に対応できる「生きる力」が培われる。</p> <p>研究内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習の手引きの実践状況の把握</li> <li>・学習相談の充実(定期テスト前、長期休業日の間)</li> <li>・少人数授業や個に応じた指導のための多様な指導体制についての研究と実践（評価の方法・教材の開発）</li> <li>・定期的な学力調査の実施(客観的な評価による学力実態の把握)</li> <li>・指導と評価の一体化(規準・基準の見直し)</li> <li>・自己評価や相互評価を生かした指導方法の工夫</li> <li>・総合的な学習の時間の充実</li> <li>・成果と課題を検討し、充実を図る</li> </ul>
----------------	--

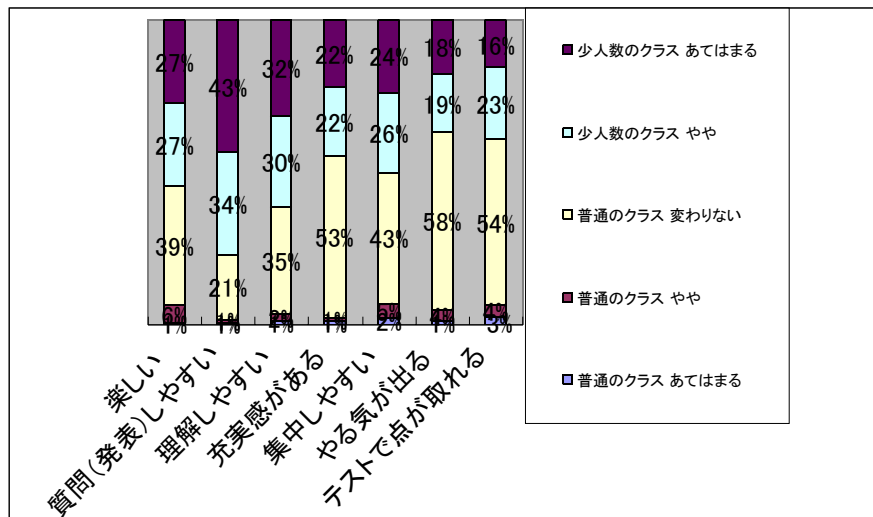
(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

<p>(1)成果 「少人数授業」について(生徒アンケート結果から)</p>
---



(ア) 普通サイズの授業に比べ、「楽しい」(54%)「質問しやすい」(77%)「理解しやすい」(62%)「集中しやすい」(60%)において「あてはまる」「ややあてはまる」と答え、「充実感がある」(44%)「やる気が出る」(37%)「テストで点が取れる」(38%)においても、概ね好意的に受け止められていた。感想につきのような意見が多く見られた。

「質問がしやすくなった。」 「よく分かるようになった。」  
 「大きな声が出せるようになった。」 「授業が楽しい。」  
 「黒板で問題を解くことができた。」 「緊張感があり集中できる。」

- (イ) 生徒の定着度をより細かく点検でき、授業の進み具合を適切に調整することができた。
- (I) 定期的に行った客観的な評価により、基礎学力の伸びがある程度見られる。中でも中間層の生徒の力がついてきている。しかし、学習下位とみられる生徒については顕著な成果を見るには至っていない。さらに学年別では、一年生段階での少人数指導によって顕著な伸びを示す生徒がみられ、早い時期での基礎的・基本的な学習指導が重要である。

「総合的な学習の時間」について

- (ア) 調査学習に、比較的抵抗なく取り組むことができるようになった。
- (イ) 調査学習を行うための大まかな手順を身につけ、生徒だけでも学習を進めることが可能となった。
- (ウ) 情報収集、整理能力が向上した。
- (I) 大勢の前で話をするに少しずつ抵抗がなくなってきた。

こうした効果から、学校生活全体に積極的な姿勢がみられるようになった。

## 2. 今後の課題

- (ア) 基礎的な事項について繰り返し学習に取り組んだ。しかし、授業中ではできることも、テスト等の結果に現れるには至っていない。
- (イ) 基礎に力を入れているクラスの中でも定着度に差があり、「個に応じた学習」には、さらに細かなカリキュラムと指導体制が必要である。選択教科での応用的な学習や基礎的な学習との関連をさらにもたせていくこと、宿題の出し方、効果の上がる学習方法など課題は残る。
- (ウ) 自己評価や相互評価を生かした指導の工夫にも取り組んだが、学習をフィードバックするには時間がかかり過ぎる。
- (I) 家庭学習については、授業で見つけた課題を予習や復習へとつなげることができていない。学習意欲の問題とも関連して具体的な手だてが必要である。
- (オ) 「総合的な学習の時間」については、生徒たちは概ね興味を持って活動しているが、その熱意に温度差があることは否めず、取り組む姿勢とその成果に差が生じてしまうことがある。

学力把握のための学校としての取組

調査の目的

学力向上の実態や生徒の意識を探り、その結果をもとに、その後の指導方法や指導内容にフィードバックさせる。数学と英語で実施した。

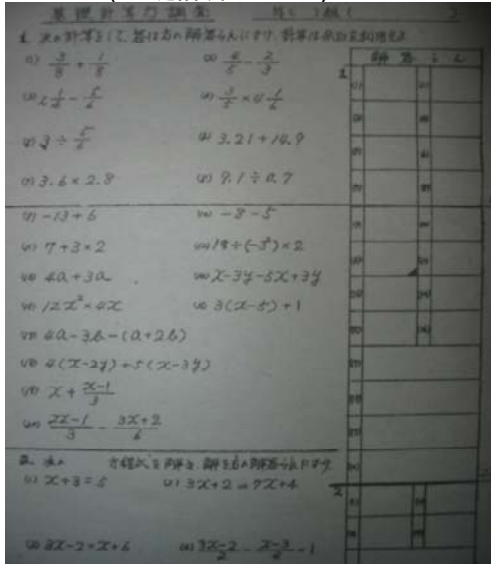
実施内容・時期

- ・生徒へのアンケート (年1回)
- ・数学科 基礎計算テスト
- ・英語科 基本単語テスト

具体的内容については、

- ・「少人数授業」について(生徒アンケート結果から)
- ・数学科 基礎計算テスト (基礎計算テスト)

を参照。



(評価方法)

小学校から中学2年生の連立方程式までの基本的な計算問題を25問選び、その定着度をもって基礎学力の客観的な評価とした。

具体的には

- 分数・・・4問
- 少数・・・4問
- 正の数、負の数・・・4問
- 文字式・・・6問
- 方程式・・・4問
- 連立方程式・・・1問

の計25問について計算問題を課した。1年生は7月と1月、3年生は4月と7月にそれぞれ2回実施した。

・英語科 基本単語テスト



(基本単語テスト)

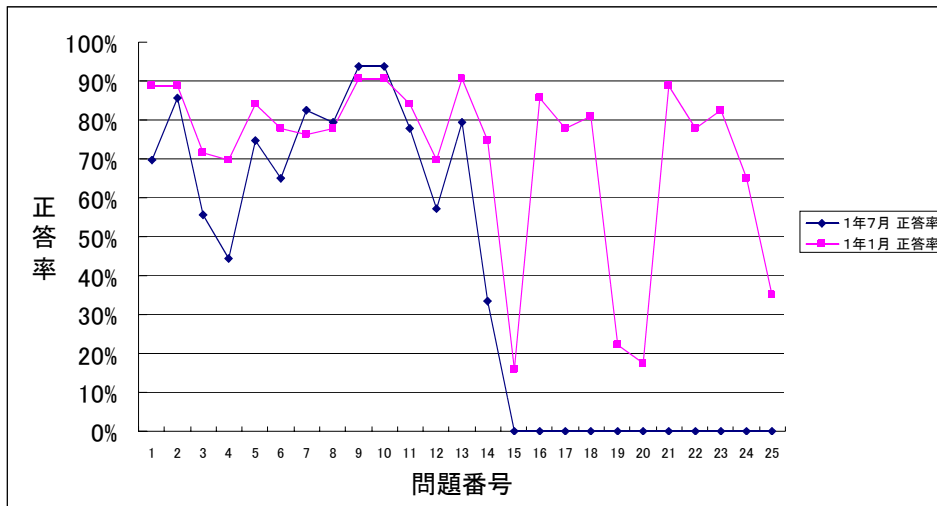
(評価方法)

学習指導要領が示す、中学3年間で必ず習得しなければならない単語の定着度をもって基礎学力の客観的な評価とした。

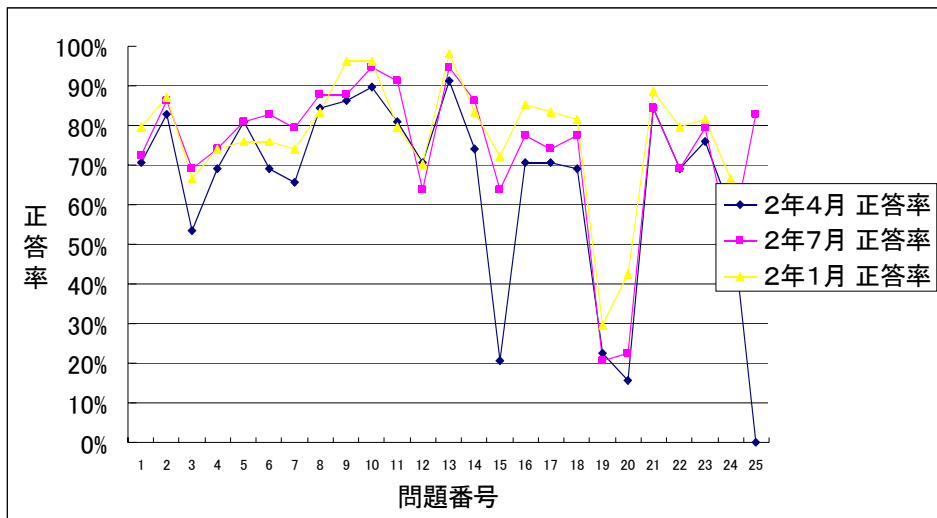
具体的には

- 1年次・・・64語
  - 2年次・・・25語
  - 3年次・・・11語
- の計100語について日本語の意味を英語で書かせる試験を行った。1回目を10月2回目を1月に実施した。

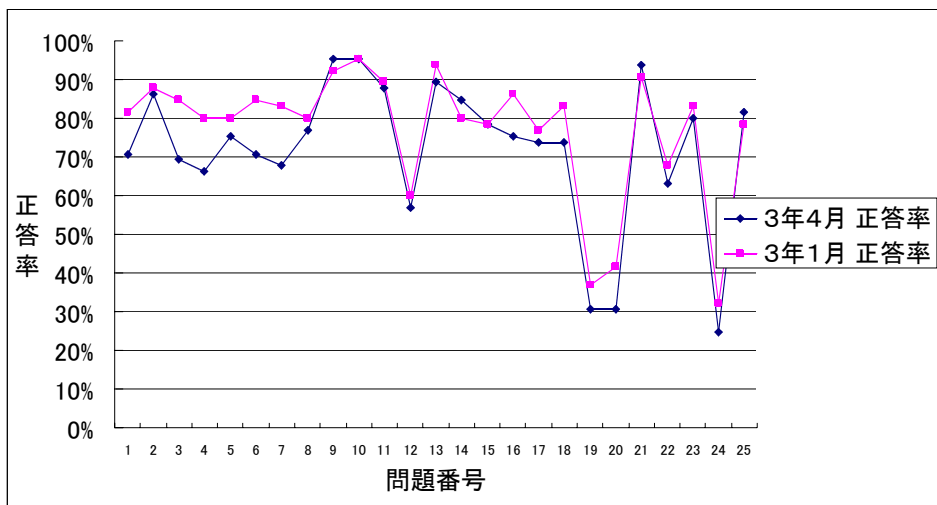
・数学科 基礎計算テストの結果  
1年生



2年生



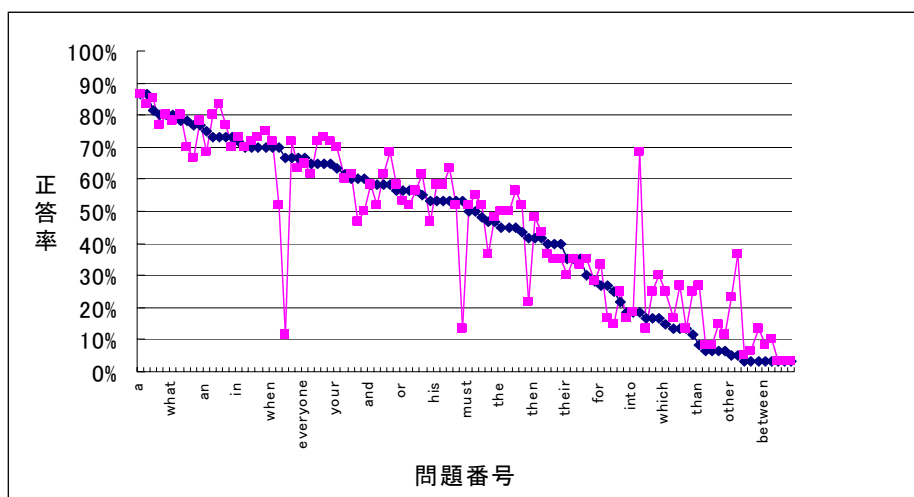
3年生



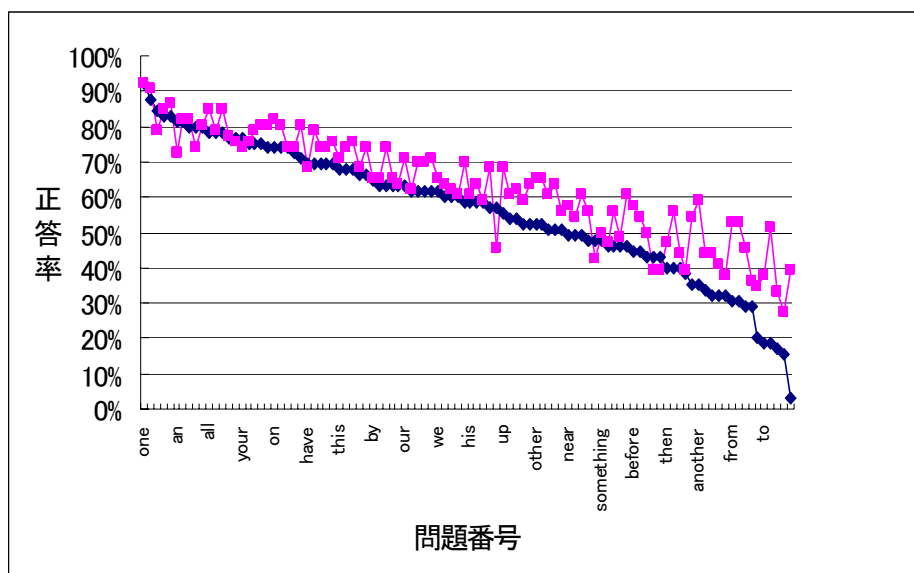
(考察)・少人数授業で対応することにより、分数・小数(1~8)の計算につまづいている生徒にも指導が行き届いた。また、全体的にも正答率が高まり、成果が現れている。  
・一年生段階で顕著な伸びを示す生徒がみられ、早い時期での少人数授業が特に効果的であることがわかる。

・英語科 基本単語テストの結果

2年生 2回実施( : 1回目平均45点 : 2回目平均46点)



3年生 2回実施 ( : 1回目平均56点 : 2回目平均63点)



- (考察) ・学年による差はあるが、1回目よりは2回目の方が平均点が上がっており、成果が現れていることがわかる。
- ・一年生では少人数授業は実施していないが、1回目に比べ2回目は既習の単語が増えたこともあり、顕著な伸びとなった。定着率は比較的高かった。
  - ・学年にもよるが、相対的に前置詞や代名詞の格変化、副詞、助動詞など日本語に置き換えにくい語の正答率が低い傾向がある。特に、2年生においては、1回目は書けているが、2回目は書けていない単語があった。
  - ・単語もだが、(基本)文としての定着度も測り、表現力の向上も図る必要がある。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

「平成15年度但馬地区学力向上フロンティア事業研修会」における実践発表

・日時 平成16年1月23日(金)13:00~16:00

・場所 但馬長寿の里 兵庫県養父郡八鹿町

・テーマ 「自ら学び自ら考える力を育成する」

~「少人数授業」や「総合的な学習の時間」の取り組みを通して~

・対象 但馬館内全小・中学校のフロンティアスクール担当教員及び、新学習システム推進教員または担当者

町内中学校研究冊子への資料提供

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】             15年度からの新規校             14年度からの継続校
- 【学校規模】                     3学級以下                            4～6学級  
 7～9学級                             10～12学級  
 13～15学級                            16学級以上
- 【指導体制】                     少人数指導                            T.Tによる指導  
 その他
- 【研究教科】                     国語                     社会                     数学                     理科  
    外国語                     音楽                     美術                     技術・家庭  
 保健体育                     その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】            有                    無